

内閣総理大臣 賞

## みんなのヒーロー

宮城県 仙台市立仙台青陵中等教育学校 3年

松山 陽奈（まつやま はるな）

困っている人への「手伝います」という言葉。そして優しく見守ること。この二つの言葉と行動を心掛けることこそが優しい社会づくりへの第一歩だと思う。勇気がなくその言葉が出なかった私にそう思うきっかけを与えてくれたのはバスで見かけたおじさんだった。

私は毎朝バスに乗って通学している。そのバスは通勤ラッシュの時間帯で平日朝から晩まで働いてお疲れの様子サラリーマンが多く乗っている。それが理由なのか、車内の雰囲気はどんよりとしていて少し怖いくらいに感じるほどだった。

そのバスがさらに怖さを感じさせる日が週に二日ある。火曜日と木曜日だ。その二日だけ手押し車と共に乗車するおばあさんがいる。手押し車を持っているだけでそれ以外は他のお年寄りと何も変わらないはずなのに……。バス車内から遠目にバス停に並ぶそのおばあさんの姿を確認すると乗客の何人かが分かりやすいため息をつき、その瞬間雑音にあふれていた車内が凍りついたように静かになる。そのおばあさんは何も悪くない。ただ手押し車を持っているからか乗るときに他の人よりも少し時間がかかるだけだ。「手伝います」と誰かが声を掛ければすぐ解決するはずなのに、私を含めて誰もその一言が出てこない。なぜなら、乗客何人かが「乗らないでくれ」という無言の圧力を放つからだ。ため息、舌打ち、コツコツと靴で床を踏み鳴らす音全て意図的に聞こえるように出していて、極めつけは「関わりたくない」と訴える視線。なぜそのような態度をとる人がいるか理由は容易に想像できる。「なんでこんなラッシュの時間帯に乗るのか。こっちは仕事があって急いでいるんだ。」という自分勝手な考えからである。おばあさんがいつどこに行こうがそれは自由で他の人に制約される理由はない。「手伝います」と声を掛けようとしている人も中にはいるはずだが、無言の圧力に負けてしまっていた。そして乗客全員でおばあさんに圧をかけるような状況をつくりおばあさんはいつからか小声で「すみません」と言いながらバスに乗るようになっていた。

ある日、そんな暗い状況の中ヒーローが現れた。ヒーローはおじさんだった。

おじさんは「今日火曜日かぁ」といつものように暗い気持ちで座っていた私の隣の席についた。おばあさんの乗るバス停に近づくにつれ聞こえてくるため息を聞いて「皆さんお疲れですね。」と私に話しかけ、おばあさんがバスに乗ろうとすると「おはようございます。手伝いますよ。」と声を掛けながら手押し車を軽

々持ち上げて席を譲った。おばあさんは最初おじさんの行動に呆気に取られていたが、すぐに満面の笑みでお礼を言っていた。そんなおじさんの行動を間近で見た感想は「おじさんは強い。」だった。無言の圧力を物ともせず、私がなかなかできなかったことをスマートにやってのけ、おばあさんを笑顔にしたおじさんはヒーローという言葉がピッタリだった。

私はそんなおじさんの行動に憧れて自分も自ら行動できるようになりたいと思った。

その後おじさんがバスに乗ってくることはもうなかった。が、私はちゃんと行動すると決めていた。一部の乗客のイライラは気づかないフリをした。バスのドアが開くときとても緊張しておじさんみたいにできるか心配だった。でもやるしかないと自分に言い聞かせ、「手伝います」と声を掛けた。手押し車を乗せおばあさんに席を譲った、その後のおばあさんの笑顔とお礼は今でも心に残っている。

おじさんの行動はバスに乗る人たちを変えた。次の火曜日「よし」と意気込んでいたら、前に座っていた高校生に先を越されてしまった。その後手押し車をバスに乗せる担当とおばあさんを支えてバスに乗せる担当という役割分担が自然とできていった。さらにおばあさんが下車する際に運転手さんに「ありがとう」とお礼をするのでつられて他の人たちも運転手さんにお礼をするようになっていった。

おじさんは乗客全員に勇気をもって行動する強さを教えてくれた。おじさんに救われたおばあさんは「ありがとう」と言うことの大切さを教えてくれた。この出来事からバス車内は優しい思いやりがあふれる暖かい雰囲気になっていった。

私たちはできない事があるのが当たり前。でも、その人にしかできないことだっている。そして全ての人が自分らしく生きる権利を持っている。だから、自分が輝ける社会を自らつくっていく必要がある。そのためにはお互いの短所を補い合い助け合うこと、優しく見守ること、この二つが一番大切だと思う。

こうした思いやりを広げていくことで、多くの人を笑顔にすることが必ずできる。

一度だけ現れてバスに乗る人全員を笑顔にしたおじさんは、間違いなくみんなのヒーローだ。おじさんに偶然、出会えたことの感謝を忘れず、勇気が出ないときはおじさんのことを思い出して「強く」生きていきたい。

## かけがえのないもの

岐阜県 高山市立東山中学校 3年

野尻 夕珠 (のじり ゆず)

普段は眠っているけれど、時々目を覚まして私の心を曇らせる思い出がある。小学生の頃の出来事だ。私は学校が好きだった。友だちとも上手くいっていると思っていた。ごく普通の小学生だった。しかし、その日の出来事は今までの自分の価値観が変わる衝撃的なものだった。

いつも通り次の授業で使う教科書を机の上に用意した時だった。それは鋭く、冷たく私の目に飛び込んできた。

「死ね」

誰かの字で書かれた、たった二文字。私は身体が固まり、自分に流れる血が一気に冷たくなるのを感じた。息ができなくて、涙があふれた。身体の震えはずっと止まらなかった。

私の様子に驚いた友だちが、慌てて先生を呼びに行き、すぐに緊急の話し合いになった。私のそばには心配してくれる友だちがいた。私に起こった事に怒って悲しんでくれる友だちがいた。それでも私は、そんなみんなが怖かった。ずっと下を向いて泣いている事しかできなかった。どんなに話し合っても文字を書いた人は名乗り出なかったし、私自身にも思い当たる人はいなかったからだ。誰か分からない人から向けられた感情は、暗やみで背後から襲われたようでとても怖かった。授業が終わって家までの帰り道は、今日の出来事を両親にどう伝えるか考えていた。それだけしか考えられなかった。あつという間に家に着き、玄関を開けた時に聞こえた母の「おかえり」の声に、また涙が出そうだった。結局、私は自分の口で両親に伝える事ができなかった。こんな気持ちになった事は初めてで混乱していたし、両親を悲しませたくないから。母は学校からの電話でその事を知った。相談したら困らせてしまうと思ったけど、思い切ってその日あった事、悲しくて怖かった事全てを吐き出した。母は私の目を見てうなずきながら真剣に話を聞いてくれた。そして、私の事をかけがえのない大切な人だと言ってくれた。私のことを想ってくれる人がいる事が分かり、安心して力が抜けた。固まっていた身体が少し緩んだ気がした。次の日学校に行くのは怖かった。やっぱり涙は止まらなかったし、足が震えた。付き添ってくれた母に学校に入りたくないとしがみついた。その時先生や友だちが私を迎えにきてくれた。話を聞くよと寄り添ってくれた先生。いつもと変わらず笑顔で迎えてくれた友だち。私はその日をみんなの支えで乗り越える事ができた。しばらく苦しい日が続いたけれど、いつの間にか私は以前のように学校へ通い、友だちと笑い合えるようになった。

しかし、今でも時々思い返すのは私に匿名で感情をぶつけてきた相手のことだ。なぜ名前を隠したのだろう。クラスで話し合いをしていた時はどんな気持ちでそ

の場にいたのだろう。私だけではない，先生や友だち，両親が悲しんでいる姿をどんな気持ちで見っていたのだろう。きっと怖くてたまらなかったと思う。不安で後悔していたと思う。学校が辛い場所になってしまったのではないだろうか。

思い出すと心は曇るけれど，私は今も学校が好きだ。友だちと過ごす事が好きだ。しかし以前と変わった事がある。それは全ての人から好かれる自分でいなくてもいいと思えるようになった事だ。社会が広がり，繋がる人が増えれば相性の悪い人と出会うこともあるだろう。しかし私には，私のことをかけがえのない大切な一人だと言ってくれる人がいる。辛い時に寄り添ってくれる人もいる。その人達の笑顔を守るためにも，私は私らしくいたいと思う。

辛い出来事だったが，私は大切なことを学んだ。それは，顔や名前のない感情は暴力になりうるということだ。両親に想いを込めてつけてもらった名前を隠して感情をぶつける事は，自分勝手に誰も幸せになれない。自由に意見を言える権利と感情をぶつける暴力は全く別のものであり，権利の基には幸せがなくてはならないのだ。感情を声や文字にする前に一度立ち止まってほしい。そして，その言葉や文字に責任をもってほしい。それだけで社会は少し変わると思う。

今の私があるのは，辛い時に支えてくれた人達がいたからだ。だから困っている人や苦しんでいる人に次は私が寄り添いたいと思う。そして自分の行動や発言に責任を持ち，自分の事を大切に生きていたいと思う。なぜなら私の心も身体もかけがえのない大切なものだから。誰もが幸せに生きる社会にするために，一人一人が自分の言動に責任をもって後悔のない人生を送ってほしい。誰の命もまた，かけがえのない大切なものなのだから。

## 「名前」

福島県 須賀川市立第二中学校 3年

須田 琴菜 (すだ ことな)

結婚したらなんていう名前になりたい？

中学生女子のおしゃべりはいつも夢に満ちた恋や結婚への憧れが散りばめられている。

「神宮寺、なんてかっこいいよね。」

「私は好きな人の名前なら何でも！」

あまり近寄りたくない話題なのに、

「琴菜は？将来どんな名前になりたい？」

聞かれてしまった。うーん。言い淀む私に一人が気を使ったように、琴菜はお家を継ぐんだよね。お婿さんをもらうから名前はそのままなんだよね、と言う。あ、そうなんだ。いいね、大人になっても SNS で探しやすいね、と誰かが言い、みんなが笑った。私もほっとしながら一緒に笑う。

私の家は四百年以上続く神社の神主の家系で、その職を継ぐのは私の小さいころからの夢だ。家族も地域の人たちもそれを喜んでくれているようで、それは私にとっても嬉しいことだ。しかし、時々ひっかかる言葉に出会うことがある。例えばさっきの「お婿さんをもらう」もそう。確かに私の家はずっと「神職の須田家」で私には姉妹しかいないけれど、私が神社を守っていくのに「お婿さん」は必要なのだろうか？

新聞やニュースで、「選択的夫婦別姓」という言葉を聞くことが多くなった。夫婦は同姓と定めている今の法律下では、姓を変える側だけが多大な不利益を被ってしまうので議論が進んでいるらしい。日本には慣習的に女性が自分の姓を男性側に変えることが圧倒的に多く、その割合は九十六パーセント。だからこれは女性の人権問題だとする声大きい。

だけど私には、残りの四パーセントの数字が心にのしかかる。私は将来の夢を目指す限り、一緒になってくれる人に、たった四パーセントの男性しか被らない不利益をお願いしなければならないのだろうか。考え出すと将来を思い描くことが少し嫌になってしまう。同じ悩みを抱えている人はいないのかと調べてみるといろんな意見、解決すべき様々な課題があった。旧姓の通称使用の限界。子の姓決定問題。婚姻に際し選ぶ姓は夫側でも妻側でも構わないのだからその点において公平だという主張もわかった。それでもなお私が将来の伴侶にどこか遠慮をしてしまうのには、もう一つ理由がある。

神社は母の実家で、父が姓を変えた。レアな四パーセントの方だ。父に、名前の変更は大変ではなかったか、と訊ねたことがある。

「ありとあらゆる名義変更。友人や知り合いへの通知。親の説得、自己喪失感。確かに大変だったけど、それよりキツイのはね、」

父は少し間をおいて、お婿さんっていうレッテルを貼られることだよ。と言った。お父さんとお母さんは、ごく当たり前に、二人で独立した戸籍を作ったんだよ。その時に妻の姓を選んだ。ただそれだけなんだけど。

「でもお父さんはお婿さんなんですよ？」

という私に父は急に真面目な顔で言った。

「琴菜、覚えておきなさい。結婚するすべての男性は花婿で、すべての女性は花嫁だ。その意味以外の婿、嫁という制度は今の日本には存在しない。婿に来た、とか嫁にもらった、という言い方をきくかもしれないけど、それは誰かを知らず知らずに貶め、不快にさせているかもしれないから、琴菜はよく気を付けようね。」

はっとした。「お嫁さん」は私たちの日常でもよく聞く言葉だ。近所のおじさんは、ウチの嫁さんが、といつも言っている。父の言うことを考えると、それすらも先入観と色眼鏡を通した言葉になってしまう。

以来、ずっと婿や嫁という言葉について私は考え続けている。古い日本の家父長制度の慣習だった嫁入り、婿入りの概念が令和の今も残っている。私の住むような田舎の地方では今もなお、苗字を変えた男性は「お婿さんなんですね」と揶揄され、女性は「嫁」としての役割を背負わされがちだ。「お婿さんだからかわいそう」「お嫁さんだから名前を変えて当然」悪気はなくても、勝手に貼ったレッテルで誰かの社会的立場を決めつけることでやはりその人の人権を蔑ろにしているのではないだろうかとは感じている。

間違った思い込みを誰かにぶつけること、それが「差別」だと思う。そして差別意識は人権の無視に他ならない。選択的夫婦別姓についての議論もこれからますます必要になるだろう。それと同時に、夫婦がどちらの姓を選んでもそれが当たり前になるよう、社会の成熟を促すことも急務だ。

勿論私だって、中学生女子的「好きな人の苗字になりたい」も素敵な気持ちだと思う。でも苗字がどちらでも、将来のパートナーと私はどんな時も対等でありたい。

だからまずは私から、偏見を含んだ言葉を人に向けないこと。間違った思い込みをしていないか常に見直すこと。私の夢を応援してくれる周りの友達にも、私の考えていることを伝えていこう、と思っている。

## ウイルスよりも怖いもの

岡山県 岡山学芸館清秀中学校 2年

小西 祥生（こにし さつき）

「岡山市在住です」

この張り紙を目にしたのは、昨年ゴールデンウィークのことだ。私はその時、家族と一緒に岡山市内をドライブしていた。前を走る車のナンバープレートが「多摩」であることに気づいた私は、

「えっ、コロナ患者が多い東京から来ているの？岡山には、まだ患者がほとんどいないのに。嫌だなあ。」

と心の中で思った。しかし次の瞬間、私はハッとした。その車のトランクの蓋には、「岡山市在住です」と大きく書かれた張り紙があったのだ。東京ではなく私と同じ岡山に住んでいると示している。この張り紙なしでは、そのドライバーは安心して運転できないと感じていることが伝わってきた。どうしてこんな世の中になってしまったのだろうか。

当時、新聞やニュースでは「他県ナンバー狩り」が話題になっていた。新型コロナウイルス感染症拡大を恐れた人達の一部は、地元ナンバー以外の車を見かけると、車のボディに傷をつけたりして攻撃した。私はそのニュースを見るたびに、なんて馬鹿なことをしているのかと腹が立って仕方なかった。しかし、東京のナンバープレートを見たときの自分の反応はどうだろう。もしかすると、自分も彼らと同じなのかもしれない。「感染症」という目に見えないウイルスへの恐怖から、感染の疑いが少しでもある人や場所を自分から遠ざけ、排除しようとする差別の気持ちが、自分の中にも生まれていたことに気づき、とても恥ずかしくなった。

日本赤十字社によると、新型コロナウイルスには三つの感染症の顔があるという。一つ目は、病気としてのウイルス感染症。二つ目は、不安と恐れという感染症。そして三つ目は、嫌悪・偏見・差別という感染症だ。私はこの三つ目の感染症が、実は一番強敵なのかもしれないと感じている。悲しいけれど、特定の病気や患者に対する激しい偏見や差別はこれまでもあったと思う。例えば、ハンセン病がそうだ。

私が暮らす瀬戸内市邑久町には、国立ハンセン病療養所が二つある。地元なので、私は幼い頃、よく愛生園や光明園の夏祭りに家族と出かけた。夏祭り会場のある島に向かう橋を渡るときに、母が、

「この橋は、昔はなかったんよ。ハンセン病になった人達は、家族と離されて島

から一生出られなかった。辛かっただろうに。今はこの橋のおかげで、こうやってお互い自由に行き来できる。すごい橋なんよ。」

と話してくれたことを思い出す。

夏祭り会場では、入所されていた元患者さん達が、車いすに乗って盆踊りの様子をじっと見ていた。その中には、口元や耳の形が変わっている人もいた。幼かった私は、最初怖いと感じてしまった。しかし、側にいた大人の女性が元患者さんに普通に話しかけ、一緒に楽しそうに笑っている姿を見たとき、

「ああ、別に怖がらなくてもいいんだ。」

と安心したのを今でも覚えている。あの時の女性の自然で正しい対応を見て、ハンセン病に対する私の恐怖心は、すうっと消えていった。子どもは大人の行動や態度を見て、相手が嫌悪・偏見・差別の対象になるのか判断する傾向があると思う。一人一人の正しい言動は、不安や恐れや差別への抑止力に変わるのだ。あの日の女性のように、私も正しい言動で次の世代の差別を止められる存在になりたいと思う。

夏祭り後も私は小学校で、ハンセン病について学ぶ機会に恵まれた。今ではハンセン病は薬で治療できる病気であること、うつる可能性はほとんどないこと、遺伝しないことなどの事実を学び、ハンセン病が恐れや差別の対象ではないことを改めて確認した。社会見学で光明園を訪れたとき、元患者さんが、

「こんな悲しい歴史がここであったことを忘れないでください。二度とこんな悲しい思いをする人がいない社会にしてください。」

と語られたことが忘れられない。ハンセン病での過ちを私達は決して繰り返してはいけない。それなのに、コロナ禍の毎日で、私達はその学びを活かせていないように感じる。

考えてみると、ハンセン病と新型コロナウイルス感染症は似ている。守られるはずの患者やその家族が、周囲からの偏見や差別にさらされてしまう点が共通していると思う。しかし、私は学んだ。嫌悪・偏見・差別の元となる不安や恐れを絶つには、うその情報に惑わされず、事実を正しく学ぶことが、とても大切なのだ。

新型コロナウイルス感染症がまた拡大している今、予防を徹底しても、感染してしまう可能性は誰にでもあると思う。その時には、相手を「排除する」のではなく「一緒に治療しよう」という温かい社会を私達で作っていきたい。私達一人一人の言動で、社会は変わるのだから。



## コロナ禍で学ぶ

福岡県 築上町立椎田中学校 2年

出口 真帆（でぐち まほ）

まだまだ新型コロナウイルス感染症が増え続けています。感染者が増えている他に悲しい問題が起きている事をみなさんは知っていますか。それは差別や偏見です。私の母は医療従事者です。職場で様々な話を耳にすることが多いそうですが、母自身も発熱外来で心ない言葉を浴びせられることが実際あるそうです。そういう話を聞き、私はコロナ差別をなくすためにはどうしたらいいのか調べ、考えてみることにしました。

「恐れるべきはウイルス。人ではない。」

これは、人権教育啓発推進センターの専務理事であり、日本財団の特別顧問も務める田南立也さんが言っている言葉です。私はこの言葉を聞き、誰が感染してもおかしくない状況の中で感染者や医療従事者の方などを差別することは自分の首を絞めることと同じことなんじゃないかと思いました。また、それと同時にハンセン病について学校で学んだ事を思い出しました。誤った理解で患者さん、回復者さんとその家族に対し、社会からのけ者にする、法律で強制的に隔離するなどといった差別が日本で九十年以上も行われてきたと知りました。日本でこんなにもひどいことがあったと知った時、すごく胸を締めつけられる思いでした。ハンセン病と新型コロナウイルス感染症は単純に比較できないものの、感染症に対する誤った知識や見解が差別や偏見に繋がるということはどちらも共通しているといえます。

新型コロナウイルス感染症に関する誹謗中傷などの差別や偏見の例としては、回復しているのに出社を拒否される、コロナ感染症の患者さんを受け入れている病院で働く親の子供が保育園等の利用を拒否される、感染者個人の名前や行動を特定し、SNS等で公表・非難するなどといった事が報告されています。

今は沢山の人がSNSを活用している時代です。しかし、日々重症患者さんの対応に当たる看護師さんはSNSのアプリを削除する人が増えているそうです。それは、大人数での飲み会や旅行・テーマパークで楽しむ友人達の投稿が緊迫した現場とは全くの別世界で、そのギャップがしんどいからだそうです。また、現場の医療従事者の方を差し置いて様々なデマ、陰謀論、そして医学的に誤っている議論が横行していることも知りました。思った事を世界中の人達に共有できるというのは責任も問うということを再確認しました。そしてこの記事を見て、根拠のない情報に基づく差別や偏見の多くは日常のなかで無自覚になされることが

多いというのに気づきました。新型コロナウイルスに対する正しい知識を持っていないことから、過度に不安や恐れを抱き、過剰な行動をとってしまうこと、これが差別や偏見に繋がっていると感じました。思い込みを避け、正しい情報を確認し、科学的根拠の乏しい過剰な反応は控え、冷静に行動することが大切だと思います。

みなさんは「シトラスリボンプロジェクト」というのを知っていますか。これは誰もが感染のリスクや不安を感じるなか「おかえり」「ただいま」と言いあえる空気や人の輪を広げ、暮らしやすい社会をつくっていこうという運動のことです。コロナ禍で生まれた差別や偏見の存在を知った愛媛県の有志が始めたそうです。また、我が町でもこの運動に賛同しています。こういう活動がある事で思いを形にできるようになってきています。正しい知識と情報をもとに行動することが自分を、家族を守ることに繋がっていくと思います。

ウイルスが発見されて一年以上たった今もなお見えない敵と私達は戦っています。今までの生活も環境も行事なども、全て新型コロナウイルスによって奪われてしまいました。やっぱり悔しいし、怒りも湧きます。でも、いつもの日常がなくなり、当たり前というのがどれだけ幸せだったかを教えてくれたのは新型コロナウイルスではないでしょうか。誹謗中傷などの差別や偏見、多くの問題を目の当たりにした事で、調べ考えるという行動をして、人を思いやる心の大切さも新型コロナウイルスから学びました。ハンセン病での過去の過ちを繰り返さないというのを守り、時代を乗り越えていくのは今だと思います。ここで「繰り返さない」というのを口だけにはしたくありません。こんなに苦しい世の中でも私達は生きています。そしてこんなに苦しい世の中だからこそ人と人とお互いに支えあって乗り越えた時、私達は人間として大きく成長できるのではないのでしょうか。

感染というリスクがある中で終息を願い、最前線で働いてくれる医療従事者の方々、本当にありがとうございます。新型コロナウイルスでの問題に関係のない人はいません。同じ時代を生きる一人一人が自分には何ができるのかを考え、行動して差別のない、人を思う心で溢れる世界を実現させたいです。

## “ありがとう”

静岡県 浜松市立北部中学校 3年

小木曾 莉桜（こぎそ りお）

「りおちゃんの言葉は私の薬」

私はこの言葉に大きな衝撃を受けた。

中学1年生の頃、クラスに「一型糖尿病」をもつ女の子がいた。彼女は食後必ず注射を自らの手で打つ。そして、血糖値が高すぎたり低すぎた際にはまた別の注射を打つ。毎日それをくり返していた。「打たなければ死ぬ」という恐怖、注射の痛み、当事者になってみなければわからないことだが、「辛く苦しいこと」だというのは私にでもわかる。

入学し、彼女が自分の病気について明かしてから何日かたったある日、

「なんであんな奴、俺らの学校に来たんだよ。」

そう、一人の男子が言ったのだ。その一言をきっかけに彼女は周りから以前とは違う目で見られるようになった。そしていじめへと発展した。

「病気をもっているから私達とは違うという勝手な偏見や差別、このようなことはあってはならない。」私はそう思った。でもそれを言えなかった。怖いから、いじめられるのが……。もし、自分にいじめのまが変わったらどうしよう、と自分のことだけを考えていたのだ。結局、私がやっていたのは見て見ぬふりで、いじめている人たちと何も変わらない。

私たちが彼女を見る目は悲しくなるほど冷たいものだった。私たちのその目や、ひとつひとつの小さな言葉がどれだけ彼女の心に傷をつけたことだろう。それから彼女は学校を休む日が多くなった。

「今日もいねえじゃん、ラッキー。」

「○○？誰それ？そんな奴いたっけ。」

まだそんなことを言っているの？とはやはり言いたくても言えなかった。

ある日、彼女が過呼吸になっていた。私は、

「大丈夫？」

と声を掛けた。言おうと思って出た言葉ではない。無意識でとっさに出た言葉だった。

「ありがとう」

そう返って来た。“ありがとう”この言葉を聞いて今まで自分がしていたことを心底後悔した。人の心を傷つける言葉があるのなら人の心を癒す言葉もあるだろう。そして私がかけた「大丈夫？」という一言が傷ついた彼女の心を癒したのだと思う。“ありがとう”この一言で、私は「変わろう」と思った。だから私は

声を掛け続けていこうと決めた。

私が彼女を手伝っているのを見て、文句や悪口を言う人はたくさんいた。しかしその分

「私にもできることある？」

と私の味方をしてくれる人たちもいた。怖くて言い出せずにいた人は私以外にも大勢いたのだ。私が少し変わったことで周りにはいる人たちも大きく変わった。人は人で変わると改めて思った。

たくさんの方が彼女と話すようになり彼女は元通り学校に来るようになった。本当に嬉しくて変わって良かったと思えた。

一年生終了と同時に私は引っ越すことになり、皆が私に手紙をくれた。ひとりひとりの手紙を読んでいくと、彼女からの手紙を見つけた。ぎっしりと文字がつままっていて、私へのお礼の文がそこにはつづられていた。そして最後の一文に「りおちゃんの言葉は私の薬でした」とあった。言葉にはそれほどの力があるのだと確信した。

私一人では、彼女へのいじめを止めることはできない。いじめは、いじめる人が変わらなければ終わらないと思う。でも、私一人でも彼女を助けることはできる。それは、一言かけるだけ。たった小さな一言でも、彼女にとってはとても大きいもので彼女の心を支えることができる。

はじめに一人変わることによって周りも変わり、その周りも変わる。私はそのはじめの一人になりたい。そして、皆の心の支えとなる存在になりたい。これは私の夢だ。

自分自身を変えることというのはいじめを減らすために私ができる最善のことだと思う。

自分を変えるというのはとても難しいことだけれど夢を叶えるために私は実行してみせる。

私は彼女に出会えたことにとても感謝している。私をこれほどに成長させてくれたのは彼女だ。

そんな彼女に私は「ありがとう」の言葉を返したい。

## 見えない心を見るために

香川県 高松市立龍雲中学校 3年

河渕 なずな（こうぶち なずな）

私の通う中学校は、在校生数が千人を超えるマンモス校だ。そのため下校時にはたくさんの生徒や自転車でごった返す。その日、私は部活動を終え自転車で信号待ちをしていた。歩道は変わらず自転車の列で溢れていた。その中を青信号の横断歩道に向けて、一人の男性が歩いて来た。ポロシャツにリュック、手には白杖を持っている。私は咄嗟に「あ、この人は目が見えないんだ。自転車を避けなくて大丈夫かな。ぶつからないかな。青信号を渡れるかな。」と思いじっと見ていた。けれども私の心配をよそに、その男性は器用に自転車の間を通り抜け、青信号を渡って行った。

「あんな人混みをぶつからずに通るなんて凄いな。」私は安心と驚きが混ざったようなこの気持ちを早く伝えたくて、玄関のドアを開けるなり母に話し掛けた。

「さっきね、学校の前で男の人が歩いてってさ、自転車にぶつかりそうで危なかったけれど、そのまま横断歩道を渡って行ったんよ。白杖をついとったから目が見えないんだと思うけど、凄くない？」

母は私の話を聞き、それは同じ職場で働く同僚ではないかと言い、その男性の話を聞かせてくれた。

「〇〇さんは、目はよく見えないけれど他の人と何も変わらないよ。行動力があって掃除をお願いしても、順序や物の場所を最初に説明すれば無理ですと言うことはないよ。職場では白杖も持たずに移動しているし、外を走る車や室内の音から、自分がいる場所もわかるみたい。そう言えば、〇〇さんが聞いている音声情報が凄く速くて他の人は殆ど聞き取れなかったことがあったよ。」

母の話を聞いて私は言葉が出なかった。小さい頃からより多くの情報を耳で得てきた結果、速さにも対応できるようになったのだ。また母も初めは何でも手助けしなくてはと思っていたが、今では普段と違うことがあれば伝えたり、困っていれば手助けしたりするだけにしているそうだ。ひとりで何でも出来ることも、周りも特別扱いしていないことも私が想像していた「目の見えない人」の状況とはまるで違っていた。

ある日、担任の先生が道徳の時間に絵本を紹介してくれた。ヨシタケシンスケさん作の『みえるとかみえないとか』。環境や体の違いを宇宙の星や車にたとえ、人について分かり易く疑問を投げ掛けている。絵本なんて子どもが読むものだと軽く考えていた私だったが、先生が聞かせてくれた内容がとても奥深く、改めて

図書館で借りて読んでみた。

住む星が違えば、それまで当たり前だったことがかわいそうだとされたり、驚かれたり、気を遣われたりする。いつもは出来ていたことが、とても不便に感じることもあった。私は過剰な気遣いが同情されているようで嫌だった。自分と違うことは、分かっているようで実は全てを理解することは難しい。同じ所や違う所を互いに理解して寄り添い、思いを伝え合うことで心は繋がる。そうして居心地の良い場所が生まれるのではないか。

私は自分の過ちに気が付いた。目が見えないことをかわいそうだと特別視していた。その特別視が同情や偏見、差別を引き起こしてしまう。知らず知らずのうちに自分も差別に加担していたのかと思うと恐ろしい。また相手を想うことは大事なことだが、手助けや優しさも必要とされていなければ、ただの押し付けになってしまう。私は目が見えるが、目が見えない人は、私には聞こえない音を聞き取り、私には感じない感触を感じ取っている。人には得意なことや苦手なことがあるように、目が見える、見えないということは、特別なことではなくただそれだけのことではないのだろうか。

今、世の中はバリアフリーからユニバーサルデザインへと変化している。当初は障がい者用トイレと認識されていたトイレも、今では多機能トイレとして必要とする人が誰でも使えるようになってきている。また、駅利用者の安全を考えた線路への落下防止対策として、ホームドア設置の必要性も高まっている。

全ての人々が互いに人格や個性を尊重し支え合い、それぞれの多様性を認め合っ  
て社会に参加していく「共生社会」の実現に向けて、人の心もユニバーサルデザインへと変化していかなければならない。教育現場では「インクルーシブ教育」という全ての人々が共に学ぶという仕組みも少しずつ浸透している。小さな頃から色々な違いを特別視せず、仲間として過ごし学ぶことは、偏見をなくす第一歩となるのではないだろうか。

私もいつか目が見えづらくなったり、歩きづらくなったりする時が来るだろう。眼鏡を掛けたり杖をついたり、誰かに手をとってもらえるかもしれない。必要とする人がいつでも手をとることができ、必要な手を差し出すこともできる世の中へ。見えるものだけではなく、見えない心の中の気持ちも見ていきたい。

## 実を結んださくらんぼの木

愛知県 一宮市立中部中学校 1年

豊島 湊 (とよしま みなと)

ぼくが小学校に入学した時、家の庭にさくらんぼの木を一本植えた。ぼくの住む一宮市は毎年小学一年生にお祝いで入学記念樹をくれるからだ。庭のさくらんぼの木は、毎年花は咲くけれど、実がなることは一度もなかった。「なぜだろう？」と調べてみると、さくらんぼの木は一本では受粉ができず異なる品種を二本以上近くに植えることで実をつけることができるという書かれてあった。自分の木だけでは実をつけることができない事を知り、「もういいや。」と残念な思いと、あきらめに変わっていった。ところが、昨年ぼくの大きく育ったさくらんぼの木の横に新しく一本の小さな木が仲間入りした。五才離れた弟の入学記念樹だ。それは、品種の異なる木だった。

ぼくの弟は、生まれた時から発達がゆっくりで言葉がたくさんでるようになったのも、歩き始めたのも二才になってからだった。まわりの友達の弟や妹と比べると少しおそいなと思うことがあったが、両親も弟の事を「ゆっくりさん」と言っていたので、ぼくも「ゆっくりさん」なんだと思い深く考えていなかった。ところが、ぼくが小学五年生になった頃両親が自分の小学校の教頭先生と来年入学する弟の就学相談をこまめにする様になった。何を話しているのか不安になり聞いてみるとこう言った。「特別支援学級に入るかもしれない。」と。ぼくは、頭が真っ白になった。そして、「普通なのになんで？」と言った。わけが分からないあせる気持ちがどんどん高まり、「一年生は勉強も難しくないから、大丈夫。」「一年生はみんなフラフラしてるよ。」など、普通学級でも大丈夫という思いを伝えた。話を聞いていた両親はこう言った。「一番大事なものは弟が生き生きと学べる場所をじっくりと考えることだと思う。特別支援学級がどんな場所なのか知らないから不安になる気持ちも分かる。自分の目でこれから特別支援学級がどんな場所でどんな活動をしているのか見てほしい。そして見た事、感じた事を教えてほしい。」と。

「教えてほしい。」その言葉にとっても大きな頼み事をされた気分になったが、不思議と嫌ではなかった。それは、多分自分自身も「知らない」ことにおびえていたからだ。こういう機会があるまで自分の小学校の中にある特別支援学級という場所がどんな所なのかよく知らなかった。その日から、ぼくは学校生活を送りながら下を通る時も、校庭にいる時も注意深く特別支援学級の活動を見るようになった。そして日々見ていく中で色々な事を知った。「勉強をあまりしていない、テストがない、宿題もない、人との交流が少ない。」と勝手にいだいてい

たイメージはみごとに外れた。勉強は普通学級のように一斉に何かを学ぶのではなく、一人一人の特性に合わせてじっくり学びを進めていた。そのためテストはないのではなく、一人一人の学びのタイミングでしているという事も知った。宿題は、全員が同じものではなく、個人に合わせて毎日出ている事も知った。野菜を育てたり収穫している姿も見たことがあったがそれは、生活科と食育の勉強だということも分かった。そして何よりも、人との関わりが少ないと思っていたが、一人一人のペースで普通学級の授業に行ったり、給食に参加したりと壁がないことも学んだ。見えない壁を作っていたのは、自分自身の心だったことにも気づいた。

いよいよ弟が入学する頃、はっきりとこう感じた。「特別支援学級は、弟が学校生活を生き生きと楽しめる所なんだ。」と。

ぼくの心は一步前進した様に感じた。弟が入学してからは、ますます特別支援学級が身近なものになっていった。弟は毎日喜んで登校することができた。そんな姿を見ながら自分もカッコいい姿を見せたいと思い児童会活動や勉強を頑張る事ができた。時には友人から「お前の弟普通じゃないの？」と言われる事もあったが、そのたびにこう伝えた。「発達がゆっくりだからていねいに勉強をしているんだ。」とほとんどの友人は「そうなんだ。」とあっさり受け入れてくれた。そして、「普通」という言葉の意味についても深く考えるようになった。「普通」その言葉だけで人を簡単に分けることは決してできないと。

庭に植えてから六年間一度も実がならなかったぼくのさくらんぼの木。その横に、弟のさくらんぼの木が並んだ。その次の春、見事に実をつけることができた。「人はたった一人では実をつけることはできない。」隣にいる誰かの大切さに気づいて、その人の事を知ろうと努力した時、初めて実を結ぶんだと思う。そして、その気持ちこそが世の中にある全てのへん見や差別を取り除く力になるんだと感じた。また、「知る」だけではなく、「知っている」ことを知らない誰かに自分の言葉で伝える勇気も大切なのだと学んだ。



## 同情ではなく共感を，そして協力を。

神奈川県 横浜市立南高等学校附属中学校 3年

霧生 帆南（きりう はんな）

障がいのある方にとっての障壁は、歩道の階段等の物理的なものにはもちろん、情報の行き交いや意思の疎通におけるものにも存在しています。その中で私は、視覚障がいのある方々にとっての障壁のことを考えました。

私は本が好きで、学校で図書委員を務めています。また、図書館にもよく足を運びます。活字を見ることで気持ちが落ち着き、読んだ内容に感動することもあるからです。また、本の感想を他者と交換することもあります。「読書」について考えると、視覚障がいのある方々にとって、点字は活字のような役割を果たします。しかし、点字を読めない視覚障がい者の方にとっては、目が不自由なことで、本から得られる情報や情動を共有しにくい障壁があります。それをどうにかして取り払いたいと、私は考えました。

私は、小学生の時に国語の授業で点字を学びました。たった六点で一文字を表現し、視覚障がいのある方にも情報を伝達できる点字に感動しました。当初は点字を覚え、日常で出会うそれらを読めるようになりたい、という一心でした。けれどその後も興味は深まっていき、小学五年生の時には点字盤を買ってもらい、夏休みの自由課題として本を点訳することにしました。その時、点訳の仕方を参考にするために、横須賀市点字図書館へ行きました。

この図書館を利用する人の多くは、視覚障がいのある方や点訳ボランティアの方です。私は図書館の運営スタッフの方に点訳された本を見せてもらいました。この図書館に来たわけをお話しすると、視覚障がいのある女性スタッフの方を紹介してくださいました。その方は点字そのものについて、また、点訳をする際の注意点について教えてくださいました。日常的に点字を読んでいるからこそ分かる、点字を読みやすくする工夫等の配慮は、彼女に出会えたからこそ、私にも気付けたことでした。点字についての話の後、私の通う小学校や好きな本についても話したり、彼女に質問をしたりしました。当時小学生だった私にとって、普段全く違う環境で生活している、年齢の離れた方と話す機会はあまりありませんでした。そのため、この経験は、大変貴重なものになりました。そして、その時抱いた私の感覚は、障がいのある方と話した、というものではなく、人生の先輩から色々なことを教えていただいた、というものだったのです。

彼女は目が見えない分、耳からの情報を頼りにしていて、目が見えなくなっただけから、それ以前よりも聴力が発達したと話していました。普段聞いているラジオは、日常会話の二～三倍の速さだそうで、私も実際に聞かせていただきましたが、

全く聞きとれませんでした。障がいがあることで、そうでない人と同じようにはできないことがあっても、障がいのない人にできないことを、障がいのある人ができることもあるのです。

私はこのように、視覚障がいのある方と関わるまでは、障がいのある方に対して「大変なのだろうな」と同情する気持ちを抱いていました。しかし「同情」は「違い」を基盤に相手を思いやることで、「共感」は「同じ」すなわち共通しているところを見つけて向き合うことです。私はこの経験から後者の大切さを学びました。

障がいの有無にかかわらず、人にはそれぞれの悩みがあります。「同情」は障がいの「ない」人から「ある」方への一方通行の感情になることがあります。 「共感」は互いを思いやり、双方向に生まれ得る気持ちだと思います。「共感」から発する「協力」で、障がいの有無を越えて、障壁を取り払うことはできないでしょうか。もちろん今の世の中は、障がいのある方が支えられる場面が多いかもしれませんが。けれど、私の知り合った視覚障がいのある方の元へは、私には捉えられなかった光や音が届いていました。高質かつ迅速なテープ起こしをもその一つだと後に私は知りました。彼らだからこそできることで、私たちも支えてもらおう。「助ける・助けられる」関係性を固定化しない。助けが必要な面を互いに理解し合い、助け合える間柄でいられること、それを私は目指したいと思います。

同情ではなく共感を、そして協力を。同じ心に根ざして行われるならばそうありたい。私は社会の一員として、協力の土台となる「橋渡し」のできる存在になりたいと考えています。これからも点字を学んで、点訳を積極的にして、点字を読めない方には、点字の特徴や素晴らしさを届けながら、字だけで表現しきれない感覚的な素晴らしさも共有できるようにしていきたいです。一方通行ではなく双方向に。誰とでも協力し合える社会を築き上げられることを信じて。

## 伝統文化の在り方とは

佐賀県 佐賀県立香楠中学校 3年

権藤 佐和 (ごんどう さわ)

日本には、様々な伝統文化がある。和食、武道、祭り、行事。その数は、きっと数え切れないだろう。

その中の一つ、獅子舞について考えていきたい。私の住んでいる地域では、四年に一度、獅子舞が行われる。そこまで知名度は高くないが、地域の人たちが大切につないできたものだから、これからも守り、伝え続けなければならないと思う。そんな私たちの地域の獅子舞だが、私は少し疑問に思っている点がある。それは、参加できるのが男性のみで、女性は参加できないという点だ。これは、私の地域のみ文化なのかもしれない。だが、私は一度も獅子舞に参加したことがない。もちろん、観たり聴いたりすることはできる。しかし、女性は獅子の演技や、鐘、太鼓の演奏などをすることができないのだ。私は、これは男女差別だと思う。男性のみが参加できて女性の参加が認められないのは、立派な男女差別ではないだろうか。男女差別は、差別は無くしていかなければならない。正直、私には男女差別の明確な定義なんて分からない。けれど、「女の子だから」という理由で獅子舞に参加させてもらえなかった小さい頃の自分を考えると、何だか悔しい。ずっと祖父や父、兄が参加していた獅子舞は私の憧れだった。しかし、私たちの地域の獅子舞は男女差別の前に、伝統文化であるのだ。

私は家族から、「多少の変化はあったものの、この獅子舞は、この形のまま古くから受け継がれてきたもの」だときいた。つまり、ずっと昔から「男性のみが参加できる」という点も受け継がれてきたのだ。今でも女性の参加が認められないのは、ある意味、伝統文化を守り、残してきたためといえる。文化を守り、後世に伝えるということは素晴らしい。文化継承などというのだろうが、その素晴らしさは、学校でもニュースでも、今の時代は色々な場所で感じることができる。だからこそその問題なのかもしれない。はたして、私たちの地域の獅子舞は、「女性の参加を認めない」という点も文化として残していくべきなのだろうか、変えていくべきなのだろうか。

少なくとも、現時点の獅子舞に対して男女差別だと感じている人がいるのは確かだろう。近年は人々の差別への意識が高まってきた。「当たり前と思っていたけれど、もしかすると差別かもしれない」と思っている人が少数でもいるはずだ。それに、私だってその一人である。だが、「男性のみが参加できる」のは、受け継がれてきた文化の一つでもある。この文化を変えてしまってもいいのだろうか。今までにも獅子舞は細やかな変化はあったそうだが、この「男性のみが参加でき

る」という文化を変えてしまうと、地域みんなを守ってきた獅子舞が違う獅子舞になってしまうような気がする。かと言って、女性も参加できるようなものに変えないとなると、この男女差別はこれからも受け継がれてしまう。

これは、とても難しい問題だと思う。私は、これまでの獅子舞を、女性も参加できるように変えていくべきだと思う。前記のように、文化を変えるといった大きな変化は、これからの獅子舞に影響を与えるはずだ。でも、私はみんなと一緒に獅子舞がしたい。また、継承された文化もその時代に合った形へと少しずつ変化しながら、ずっとずっと、いつの時でも無理なく続くものであってほしい。けれど、考えは人それぞれだ。答えは一つじゃないのだろう。もしかしたら、答えさえないのかもしれない。

では、なぜ男女差別が文化として残っていったのか。私は、男女差別は日本の昔からの考えの一つだと思う。「男が家を継ぐ」という話なんかもそうだ。私たちの獅子舞が生まれたその当時は、「男性のみが可」などの現代でいう差別的考えは普通で、そもそも「差別だ」という認識がなかったのではないか。しかし、様々な情報が飛び交う今、私は古来の文化や考えとの向き合い方について考える必要があると思う。

昔は今の差別的考えが主流だった。だから当時の人々がそれを継承しようとしたのは自然なことだ。そして、その過去を変えることはできない。このことを受け継いだ今の私たちが、その文化とどう向き合っていくか。差別や人権問題について考える現代人みんなに出された一つの課題ではないだろうか。

## 私が髪を伸ばす理由

長崎県 島原市立第一中学校 3年  
浦谷 幸歩（うらたに ゆきほ）

昨年、お祭りで偶然手にしたチラシ。配ってくれた人の手前、すぐにしまうのは忍びなく、そのチラシに何気なく目を落とした。その瞬間、私は髪を伸ばすことを決めた。そこには私でもできる人助けが紹介されていたのだ。

「ヘアドネーション」これは、小児がんや先天性の脱毛症、不慮の事故などで頭髪を失った子どものために、寄付された人毛でウィッグを作り、無償で提供する活動である。チラシはこのヘアドネーションを紹介するものであり、寄付することができる髪の特徴が記載されていた。髪の長さは十五センチ以上三十一センチ未満及び三十一センチ以上、ヘアカラーをしていないナチュラルな髪の毛、完全に乾いている髪の毛というたった三つ。それに加えて年齢、性別、国籍は問わないという。これなら私にもできると思い、妹と一緒に髪を伸ばして、ヘアドネーションをすることを決めたのである。

現在伸ばし続けて一年が経つ。妹はもともと髪が長かったため、規定の三十一センチを超えた。しかし、私はまだまだ足りず、あと十五センチは伸ばさねばならない。一言で髪を伸ばすと言っても実際にやってみるととても大変である。毛先までしっかりトリートメントをしたり、からまないように櫛でほぐしながら乾かしたりと手間がかかるのだ。それでも私が妹と一緒にヘアドネーションをするには、二つの理由がある。

一つ目はヘアドネーションを知るきっかけとなったチラシに掲載されていた市長の言葉である。

——病気に負けずに頑張る子どもたちを、島原市の子どもたちも応援できます。多くの笑顔に出会いたい。——

これを目にした時、今この瞬間も病気と闘っている子どもたちがいるのに、私は何も頑張っていない気がして、病気の子どもの力に少しでもなりたいたと思ったのだ。

二つ目は、私自身実際に病と闘った経験があるからだ。心臓病だった私は、小学生の時に心臓の手術を行った。入院中は一日中胸に機械をつけて過ごさねばならなかったり、外出ができなかったり、手術跡が痛くて背中を丸めなければ歩けなかったりと、とにかく辛かった。辛い闘病のうえに髪の毛まで失ってしまったらと想像するととても辛い。現在病と闘っている、髪の毛を失った子どもたちがウィッグで笑顔を取り戻せたら、治療に前向きになれたらと考えたのだ。人間は誰でも笑顔で幸せに暮らす権利を持っている。このウィッグは、そんな子どもた

ちを笑顔にして、当たり前前の幸せを感じさせてくれるものだと私は思っていた。

二〇二一年の夏は、東京オリンピックとパラリンピックの話題が絶えなかった。パラリンピックでの、さまざまな障がいを抱えた方が、ありのままの姿で競技に臨む姿にハッとさせられた。私は胸に残る傷跡を誰かに見られたくない。しかし、パラリンピックでは障がいが一つの個性であるかのように、ありのままの姿で競技に臨んでいる。病気などで髪の毛を失った子どもたちのためにウィッグをと考えていたけれど、本当はウィッグを付けていても付けていなくても奇異な目で見られない社会であるべきではないのだろうか。子どもたちがウィッグを必要とするのは、ウィッグがないと不安を感じる、他者の視線を感じるからではないか。髪の毛がないことに対する偏見や差別から自らを守るためなのではないか。私がヘアドネーションに参加することは差別に加担することにつながるのではないだろうか……と分からなくなった。

ヘアドネーションについて、再度調べてみた。すると「本当はウィッグをつけたくないけれど、お母さんがつけてほしいと言うから」とウィッグを希望する子どもも少なくないそうだ。髪の毛を失った全ての子どもたちが、ウィッグを望んでいる訳ではない。そして、一つのウィッグを作るのに二十人から三十人もの髪の毛が必要だという。多くの方のヘアドネーションによって、一人でも多くの子どもたちにウィッグを届けられる社会は、ウィッグを付けたい子どもたちの笑顔を取り戻し、病気と闘う気持ちを後押しすることができる。しかし、それは良い社会になったということではない。ウィッグを付けていても付けていなくても、奇異な目で見られない社会を目指さなければならないことを忘れてはならない。

私が髪を伸ばす理由。ウィッグを付けることで病気と闘う子どもたちが笑顔に前向きになれることを願って。そして、ウィッグを付けない選択も堂々とできる、多様性が受け入れられる社会を願って。

## 「理解こそが鍵」

福島県 いわき市立小川中学校 1年

遠藤 陽菜（えんどう あきな）

私には命に直接関わらないが、地味に辛い病気がいくつかあります。生まれつきの弱視、重度のアトピー性皮膚炎、ホルモンバランスが保てない橋本病。これらの病気のおかげで、嫌な思いをする事が多々ありました。今は眼科の先生のおかげで視力の矯正ができ、普通のメガネで日常生活を送れるようになりましたが、治療を始めた頃は二枚重ねの分重いレンズのメガネを使っていたので、目がとても大きく見えて、公園に行くとしょっちゅう「あいつ目デカイよね」とか「変な目」とからかわれ、それに気付いたお母さん方が「そんなこと言っちゃダメ。可哀想でしょ？」とたしなめる場面を何度も見てきました。その度に「私は可哀想な子なのかな？別に普通だけど」と不思議に感じたし、一緒にいる母が辛そうな顔をしている事がとても悲しかったです。アトピーも同じです。皮膚に良いからと温泉に連れていってもらった時、私の身体を見た年配の女性から「ずいぶん酷いけど、うつる病気じゃないでしょうね。」と言われてしまい、結局温泉に入らずに帰ってきた事がありました。また別の日には買い物をしていた私達に近づいてきた女の人が母に向かって「こんなに酷くなっているのに、ちゃんと病院行ってます？女の子なのに可哀想でしょう。」と話し始めたので驚きました。確かに私の皮膚は調子の良くない状態だと痛々しく見えます。でも皮膚科の先生に定期的に診察していただいているし、薬もぬっています。夜、かゆみが酷くなりかきむしってしまう私の手を自分だって眠いの握ってくれる母に投げかけられた言葉は、私の為に言ってくれたとはいえ、余りに残酷だと思いました。小学生の頃橋本病のせいで白髪が多い私に「ババァみたい」と言ってきたクラスメイトもいました。髪を伸ばして三つ編みにしてみたいと思う時もありますが、白髪が目立つので常にショートカットにしている苦労も知らないで、と腹が立ちました。これらはほんの一例で、全てを覚えている訳ではありませんが、時として病気そのものよりも辛く感じます。

でも、辛い事ばかりではありません。病気を理解してくれる大勢の味方が私には沢山いるからです。クラスメイトの大半は、私の眼の事を良く知ってくれています。身体が大きな私が席替えの度に前列になる事を自然に受け入れてくれ、誰もいじわるを言いません。とても有り難く感じます。白髪を馬鹿にされた時も、それを聞いていた子が「陽菜ちゃんがババァなら、お前はジジィだぞ。みんな同い年なんだから」と言い返してくれて、過度に落ち込まないで済みました。アトピーで水泳の授業を受ける事も出来ないし、気圧の変化や身体の周期でめまいも

酷くなり皆と同じ活動が難しい時も先生方は勿論、友達が優しく接してくれるおかげで楽しい学校生活を送ることが出来ています。病気を含めての私自身を理解してもらっているこの環境に感謝の気持ちでいっぱいです。

では、私や母に辛辣な事を言った人達は悪者かと尋ねられたら、私はきっぱりと否定します。理解してもらえていなかった事が原因だと思うからです。眼の事をからかった子が私の眼はほとんど見えなくて、厚いレンズのメガネをかけなきゃ一緒に遊べないと知ってさえいれば、あの言葉は聞かなくて済んだかもしれません。伝染病と見分けがつかない程酷いアトピー性皮膚炎があることをご存知だったら、共に温泉につかりながらあの年配の女性と楽しい一時を過ごせた事でしょう。本当に子供想いの方が症状には個人差があることを知っていたら、きっと母への労いの言葉をかけてくれたと思います。今迄は投げかけられた言葉に傷つくだけで逃げていましたが、もし、これから先に同じような事があった時には勇気を出して自分を理解してもらえるように話してみたいと思います。

このように前向きになれたきっかけは、パラリンピックのCM映像でした。義足で颯爽と走る選手の姿に感銘を受けて、義足について調べる中で、非常に多くの障がい者の方が様々な手段で自分を理解してもらえるようにと情報を発信している事を初めて知りました。その中で一人の女性のインタビューが胸を打ちました。情報を発信するようになって、元気をもらってます。とか、頑張ってくださいと声をかけてもらう機会が増えた事はうれしい。でも一番うれしいのは同世代の女の子からメイクやお洋服についての質問だといった内容でした。勇気を持って自分の事を周りに理解してもらえるよう行動するなら、同情や励ましの言葉以上にうれしい普通に接してもらえるとという喜びが得られるのだと彼女から学びました。私が抱える地味に辛い病気になんて負けてられない。私という人間を理解してもらうために勇気を持って行動しようと思えました。理解の輪がどんどん広がって、いつか世界から人を隔てる見えない境界線が完全に消えることを願っています。